

茨城県の牛久に住み、カッパの絵描きとして知られる小川芋銭（おがわうせん 1868-1938）、その芋銭を代表するのが、「河童百図」です。芋銭は、画商・俳画堂の特別の求めに応じて、河童絵を100枚描きました。

芋銭が亡くなる年、この河童絵100枚を集めて、『河童百図』という画集が刊行されました。

実はこの「河童百図」、そのいずれもが、芋銭のすばらしく豊かな教養に裏付けられて描かれていますので、作品を解説することがとても難しいのです。この度の展覧会では、敢えてこの難問に挑戦しました。その結果、今まで知られることがなかった、「河童百図」の秘密が、次々と明らかになりました。

このように書くと、「難しいかな?」と思われるかもしれませんが・・・、でもだいじょうぶ! 展覧会場では、多くのパネルを使って、「河童百図」の楽しみ方を、分かりやすく紹介します。中には、思わず吹き出してしまいそうな作品もあります。

この展覧会では、「河童百図」42点と、各図の背景となった資料を多数展示します。そのほとんどは、初公開のものばかりですので、どうぞ、ご期待下さい。



第80図「浪裡白跳」 秋田県立近代美術館蔵

「浪裡白跳（ろうりはくちょう）」は、中国の書物『水滸伝（すいこでん）』に登場する人物で、全身は真っ白、カッパに負けない泳ぎの名手です。

その「浪裡白跳」の雪のように白い尻に、カッパが見ほれています。ちょっと危ない趣味かも? いいえ違います。実は、肛門の近くにあると言われる、カッパの大好物、「尻子玉（しりこだま）」を抜き取るチャンスを、うかがっているのです。

芋銭の愛蔵書中にも、『水滸伝』がありました。



第30図「山姥とカッパ」 愛知県美術館蔵（木村定三コレクション）

「山姥（やまんば）」とは、奥深い山にすむと言われた鬼女のことで、非常に大女で、二つの山に足をかけ、間を流れる川で髪を洗ったという話も伝えられています。

絵の中には、岩のような、また山のようなものが二つと、その間に、川の流れるようなものがあります。もし、この話を知らなかったら、何の意味があるのか理解できないでしょう。

もう一つ、大切なことですが、この絵は、葛飾北斎（かつしかほくさい）の著した『北斎漫画』中の「山姥」を参考に描かれています。芋銭の芸術に、北斎の影響があることなど、かつて誰も想像したことがありませんでした。

今回の展覧会では、「北斎と芋銭」というコーナーを設けます。これは、本展の見所の一つとなります。



「山姥」『北斎漫画』より



第66図「牛股武左衛門」

「牛股武左衛門（うしまたぶざえもん）」は、江戸時代の力士。牛を平気でまたいでしまうほどの大男でした。

あるとき、カッパが武左衛門に相撲を挑みました。しかし、カッパが大勢でかかっても、武左衛門を打ち負かすことはできません。ガツカリして帰るカッパ達をみながら、武左衛門が水辺で手を洗おうとしたその時、アッという声と共に、水中に消えてしまいました。大力の武左衛門でも、水中ではカッパにかないません。

九州のカッパ伝説から生まれた作品ですが、『松屋筆記』という、江戸時代の随筆が背景にあります。

交通のご案内

- ◎茨城交通バス、茨城オートバス（水戸駅北口4番のりば）から赤塚・茨大（新原経由）行き乗車、「大工町3丁目」下車、徒歩3分。桜川西団地行き乗車、「歴史館・偕楽園入口」下車、徒歩2分。
- ◎常磐自動車道水戸インターから約7km、車で15分。

